

# 「高等学校における通級による指導」

～生徒の特性に応じた自立活動による通級の指導～

山梨県立ひばりが丘高等学校

学校長 渡邊圭一郎

山梨県富士吉田市上吉田東4-3-1

(TEL) 0555-22-8015

(FAX) 0555-22-8016

# I 学校概要（令和3年度5月1日現在の状況）

## 1 課程・学科別、男女別生徒数

昼夜	年次	普通科		情報経理科		合計
		男	女	男	女	
昼間部	1年次	5	7	5	7	24
	2年次	9	8	2	9	28
	3年次	6	10	2	2	20
	4年次	3	3	1	2	9
	合計	23	28	10	20	81
夜間部	1年次	1	1			2
	2年次	3	2			5
	3年次	1	0			1
	4年次	2	1			3
	合計	7	4			11
男女別合計		30	32	10	20	92
学科別合計		62		30		

学校概要（生徒数）

## 2 教職員数

校長	1
副校長	1
教頭	1
国語科	4
地歴公民科	2（1）
数学科	4（1）
理科	2
保健体育科	3（1）
芸術科	（3）
家庭科	1（1）
英語科	3
商業科	5
養護教諭	1
実習助手	1
ALT	1
事務職員	1 1

※ 常勤の数を表示、（ ）内は非常勤講師の数  
芸術科は、音楽、美術、書道に各1名

## 3 教育課程編成状況

本校は昼間部・夜間部の2部からなる定時制高校である。昼間部には普通科と情報経理科、夜間部は普通科がある。昼間部は1～4校時、夜間部は7～10校時にそれぞれ学習をし、年間19単位（LHRを含まない）を履修・修得することができる。通常は4年間の学校生活のちに卒業（74単位以上修得）をするが、5・6校時には3年での卒業を目指す生徒が受講する特別授業が週3日設定されている。

普通科は普通教科（科目）の学習を中心に行い、中学校までの学習内容を含むような学び直しができる授業設定になっている。昼・夜間部の違いはいくつかの選択科目等の違い等がある程度である。情報経理科は普通教科の学習に加え、商業科目の授業や検定等があるため、普通科と比べ、より社会人としての実践的な力の育成に力を入れている。

また、単位制をとっているため、生徒の実態に合わせた科目選択（履修計画）ができる。

昼間部・夜間部 普通科2年次生徒の場合

部	時間		月	火	水	木	金	年間単位
昼間部	1	10:10～10:55	世界史A	C英語 I	読み解く 国語	家庭総合	読み解く 国語	19 単位 LHRを除く
	2	11:00～11:45						
	3	12:45～13:30	芸術 I	体育	総合的な探究	C英語 I	地学基礎	
	4	13:35～14:20			LHR			
特別	5	14:40～15:25	/	伝え合う 国語	/	体育	数学史研究 情報の科学 課題研究【商】	6 単位
	6	15:30～16:15						
夜間部	7	16:45～17:30	家庭総合	芸術	世界史A	読み解く 国語	コミュニケーション 英語 I	19 単位 LHRを除く
	8	18:00～18:45						
	9	18:50～19:35	体育	地学基礎	総合的な探究	コミュニケーション 英語 I	読み解く 国語	
	10	19:40～20:25			LHR			

#### 4 研究のねらい

現在、定時制高校は大きく様変わりしており、働きながら学ぶ場よりも、小・中学校時代に環境に適応できなかった生徒たちの学び直しの場としての機能がより求められるようになってきている。本校においても同様の状況が見られ、不登校経験者の割合は年々増加傾向にある。その要因は様々であるが、人間関係を構築する力やコミュニケーション力に課題のある生徒の数が増えているように感じる。また、それらの問題はひとくくりにすることが難しいため、全体指導だけではなく個別に対応することが必要となっている。特に（比較的軽度な）発達障害等を有する生徒たちは学校生活を送る上で何らかの課題に直面し、集団生活に困難さを感じるリスクが高く、高等学校においても特別支援教育の観点に基づいた指導の拡充が必要と考えられる。

高等学校における通級による指導の制度化により、平成30年度から制度の運用が開始された。本校は、中央高校に次いで令和2年度より通級による指導を開始した。併せて山梨県教育委員会「高等学校における通級による指導」実践研究校事業の研究指定校として、令和2・3年度の2年間、通級による指導の実践・研究を行っている。本研究では、上記のような課題を抱える生徒が、(特別支援学校学習指導要領に示されている) 自立活動の内容を参考にした授業を通して、自分の特性等を正しく理解し、心理的な安定や人間関係形成能力やコミュニケーション力を高め、環境への適応を円滑にすることを第一のねらいとしている。また、学校内での適応だけでなく、卒業後の適切な就労も視野に入れ、必要に応じて外部機関との連携を図っている。

さらに、本校における通級による指導が2年間の期間限定の取り組みに終わることなく、研究終了後も継続可能なものとなることが重要である。

以上をふまえ、本研究では、教育課程、指導内容・方法、評価方法、進路指導及び実践的校内体制の構築をねらいとした。

## II 教育課程・教員体制等について

### 1 教育課程

- 学校設定教科【自立活動】学校設定科目【ライフスキルⅠ・Ⅱ】  
(以下、「ライフスキル」を「LS」と表記する)

- Ⅰ・Ⅱともに2単位で卒業までに最大4単位履修・修得が可能
  - ・ 卒業の単位として認定している。
  - ・ 自校通級（本校の生徒のみが受けられる）。
  - ・ Ⅰを修得後、Ⅱを履修することができる。

- 自立活動の内容（6区分27項目）（学習指導要領「自立活動」より）

【自立活動6区分】 ①健康の保持 ②心理的な安定 ③人間関係の形成  
④環境の把握 ⑤身体の動き ⑥コミュニケーション

- 通常の履修科目（19単位）に「加える」形（5・6校時の時間帯に設定）
  - ・ 5・6校時の授業と時間帯が重なるため、特別授業と並行して履修することができない（令和4年度以降は可能になる予定）。

例 昼間部 情報経理課2年次の場合（4年次の卒業を目指す生徒Aの時間割）

	時間		月	火	水	木	金
昼間部	1	10:10～10:55	数学Ⅰ	簿記	情報処理	保健	世界史A
	2	11:00～11:45					
	3	12:45～13:30	ビジネス実務	体育	総合的な探究 LHR	数学Ⅰ	家庭基礎
	4	13:35～14:20					
特別	5	14:40～15:25				LS 自立活動	
	6	15:30～16:15					
夜間部	7	16:45～17:30					
	8	18:00～18:45					
	9	18:50～19:35					
	10	19:40～20:25					

### 2 指導体制

- 担当者：高等学校教諭免許を持ち、特別支援教育に関する知識・経験を持つ5名  
(特別支援学校からの交流人事による1名を含む)

- LSⅠ：生徒1名に対して担当2名（※CT1名 ST1名）  
LSⅡ：生徒3名に対して担当3名（CT1名 ST2名）

- ※
- ・ CT（チーフティーチャー）…主として授業を展開する
  - ・ ST（サブティーチャー）…生徒の反応を見ながらCTを補佐、生徒を支援する

- 校内委員会（通級による指導に関する生徒支援委員会）を年3回実施し、以下の内容などを取り扱う
  - ・ 個別の指導計画の確認（課題点・目標・授業での様子）
  - ・ 次年度の履修者の決定
- 授業担当者以外の授業参加
  - ・ 本校の全職員が年2回程度、授業にゲストSTという形で参加

### 3 個別の教育支援計画、個別の指導計画、評価と単位認定

通級による指導の授業（LSⅠ・Ⅱ）を履修する生徒に対して、計画等を作成する。個々の特性についての改善・克服が各々の生徒の目標となり、年間計画に沿って指導を進めていく。

#### （1）個別の教育支援計画

- ・ 発達障害等を有する生徒に対して、入学時または在学中に必要なに応じて作成する
- ・ 特性等に起因する課題点や必要な配慮等を記載したもの
- ・ 本人、保護者、外部機関（医療機関等）と連携し学校が作成する
- ・ LSⅠ・Ⅱを履修しない生徒であっても必要に応じて作成する

#### （2）（通級による指導における）個別の指導計画

- ・ 個別の教育支援計画に基づき、担当STが作成する
- ・ 年間授業計画と個別の指導計画に基づき授業を展開する

#### （3）評価と単位認定

- ・ 年3回、個別の指導計画の目標に対する評価を文章で行う（点数化しない）  
※担当STが評価を担当する
- ・ 校内委員会（生徒支援委員会）・成績会議において単位を認定する
- ・ 評価の伝達：学期末に担当ST→生徒  
年度末にCTまたは担当ST→保護者

#### 4 LS受講生徒の卒業までの流れ

研究当初、LSの受講対象者を4年で卒業する生徒としていた。卒業後の準備を円滑にするため、以下の計画を立てた。

生徒年次	取り組み内容
1	◎通級による指導を始めるための準備期間（アセスメント期間）
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・計画的な懇談や気づき調査等を実施し、生徒の躓きから生じる困り感・課題点等を把握する</li> <li>・（必要に応じて）外部機関との連携を図る（医療・行政・福祉）</li> <li>・生徒が学校生活（通常の集団学習・活動）に慣れるよう指導・支援する</li> </ul>
2	◎LS I 受講
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の特性・課題点を把握し、改善・克服するために指導・支援する</li> <li>・落ち着いた気持ちで、集団学習・活動が行えるベースを作れる場面を設定する</li> <li>・良好な人間関係を築くためのスキル及びコミュニケーションスキルを指導する</li> </ul>
3	◎LS II 受講
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・LS I を通して把握した自己の特性等を踏まえ、実態に応じた指導を継続する</li> <li>・適切な進路選択をするために、自分に合った職種等を生徒と一緒に考える</li> <li>・インターンシップを設定する</li> </ul>
4	◎進路決定に向けて
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3年次までの通級による指導を踏まえ、慎重に進路指導を行う</li> <li>・（必要に応じて）外部機関との連携をし、密にしていく</li> </ul>

生徒が2年次からの履修を可能とするため、通級授業担当が1年次の2学期以降から計画的に懇談を行い、以下の点について確認し、履修を進めていく。

#### 【LSの履修について】

- ・原則として本校2年次以上の生徒であること
- ・生徒・保護者ともに個別の教育支援計画・指導計画の作成を希望していること
- ・生徒・保護者ともに通級による指導の受講を希望していること
- ・校内委員会（通級による指導に関する生徒支援委員会）において、受講させることが望ましいと認められること

#### 5 LS運営に関わる連携

##### （1）校内連携

履修生徒の現状（課題）として、授業の時点では学習内容を理解できるものの、日常生活においてうまく活かすまでには至っていないという点が挙げられる。そのため、授業内容が日常生活に結び付くように、継続的に指導していくことに加えて、LSの学習内容や生徒の実態を

通級授業の担当者からHR担任や教科担当にと情報共有していくことが、課題克服や般化のために重要なポイントになると考えている。

具体的な連携の形として以下の3点を意識的・重点的に行った。

#### ア 活動内容や評価の報告

- ・ 年3回の校内委員会（通級による指導に関する生徒支援委員会）や生徒情報交換会において、個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成する意義や各々の生徒の情報を通級授業を担当していない先生方にも伝え、一貫した指導を行うため必要に応じて合理的配慮の確認に努めた。
- ・ 授業で用いているファイル（生徒の記入したもの）をHR担任に渡し、授業内容を伝達し、LS以外の時間でも生徒への言葉かけで活かしてもらうように依頼した。

#### イ 全教員による年間複数回の授業参加を依頼

- ・ 通級授業を担当していない先生方に「通級による指導」を周知するためにゲストSTとして参加してもらった。主に教員によるモデリングの実施や生徒によるリハーサルを観察し、アドバイスなどを体験していただいた。教科書を用いた全体指導が中心の高等学校において、「通級による指導」に触れることで、特別支援教育の観点に基づいた指導を知る機会になり、他の教育活動にも活かしてもらえるのではないかと考える。
- ・ 先生方へのインタビューや制作物の受け渡しをする活動等を授業の一部に取り入れた。生徒の話す機会になるとともに、先生方に自然と学習内容を知る機会を設定することができた。多くの職員が関わることにより、指導体制をより持続可能なものにしていくことができる。

#### ウ 「気づき調査」の実施

- ・ 生徒一人一人の特性や実態を把握するために、「人間関係面」「行動面」「学習面」の3項目に分けた調査表を作成した。1・2年次生を対象に日常生活に困難を抱えているかどうかの判断基準を示し、日頃生徒と接している教科担当や年次担当の先生方にチェックをしていただいた。調査結果を数値として見える形で提示し、HRや教科における指導の改善やより相応しい指導の提案等を行っている。
- ・ 教師による生徒の困難さへの気づき（把握）から、LSの履修につなげるための指標の1つでもある。

#### (2) 中学校との連携

本校への入学が確定した後に、中学校から個別の教育支援計画を引継ぎ、中学時の目標や合理的配慮等を確認し、実態把握に役立てている。

## 6 教育課程・体制等の課題点

### (1) 4年で卒業する生徒を想定した指導体制

- ・ 3年での卒業を目指す生徒は、履修ができない  
→令和4年度から可能としたが、I・IIの履修の優先順位や時間割、指導体制など改善を進める必要がある。

### (2) 個別の教育支援計画の作成

- ・ 担当が特別支援教育コーディネーターに相談しながら作成する  
→現状は誰でも作れるわけではない（コーディネーターの負担が大きいのが実態）。
- ・ 1年次の担当が実態把握して作成するため、担当が変わった場合の引継等の問題がある

### (3) 通級による指導に対する理解

- ・ 本人・保護者の理解がなければ履修につながらない（他者評価との差）  
→現在の受講者以上の困難さを抱える受講していない生徒が存在する。  
（※これらの生徒への対応に教員は苦慮している）
- ・ 外部機関との連携という高いハードルがある  
→授業には興味・関心があっても、外部との連携や検査といったことには抵抗がある。
- ・ 中学校への理解  
→本校に入学してくる中学生・保護者が本校の通級指導についての情報を得る最も一般的な情報源は中学校教職員である。義務教育での通級指導と高校のそれとの相違を含め、必要な情報が正確に中学生及びその保護者に理解されるためにも、本校における通級指導について中学校教職員に説明する機会がより重要となってくる。

### (4) 文章による評価

- ・ 評価担当による主観評価となり、評価基準が明確でなく、あいまいになってしまう  
→生徒・担当者間の評価に差異が出てくるのは、目標、評価基準があいまいだからと考えられる。生徒の実態が様々であるため、それぞれの評価基準をCTとSTが情報共有し、毎回設定していくことが重要である。

### (5) 誰でもできる「通級による指導」の難しさ

- ・ ゲストSTとしての参加  
→全職員が参加しても、主の担当として関わることは難しく、実態把握の手法を知る手段や有効な支援・指導方法を選択していく知識やツールが必要とされる。



## II-2 授業実践について

### 1 履修前年度の生徒の実態と年間目標

#### LS I 受講生（2名）

生徒	知能検査	診断名	概要
昼間部2年 情報経理課 女 A	WISC-III (H30) 全検査IQ-74 言語性IQ-68 言語理解-68 注意記憶-82 動作性IQ-85 知覚統合-89 処理速度-80	(就学前) 低体重児  (手帳) なし	Bの双子の姉。小・中学校ともに通常学級在籍。視覚優位であり、話される言葉が長くなると、その指示内容を理解できない時がある。会話においては、適切な返答を即座にすることができないことがあり、苦手意識から緊張することが多い。無意識のうちに悩みを抱えてしまうことが多く、そのストレスを発散できず身体症状に表れ、頭痛に悩まされている。気候の変動によっても、頭痛は起きることがある。
	S-M 社会生活能力検査 (H30) 生活年齢-13歳7月 社会生活年齢-8歳11月 社会生活指数-69 身辺自立-7歳6月 移 動-7歳10月 作 業-12歳4月 意志交換-8歳9月 集団参加-8歳8月 自己統制-8歳8月		
目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>適切なコミュニケーションスキルを身に付け、実践することができる。</li> <li>ストレスや不安の原因になるものと自分の身体との関係に気付くことができる。</li> </ul>		
昼間部2年 情報経理課 女 B	WISC-III (H30) 全検査IQ-82 言語性IQ-72 言語理解-73 注意記憶-73 動作性IQ-96 知覚統合-98 処理速度-97	(就学前) 低体重児  (手帳) なし	Aの双子の妹。小・中学校ともに通常学級在籍。発語はなめらかであるが、言葉の意味を理解できずに発していることもある。興味関心に偏りがあり、興味のあることについてはよく話す。視覚優位であり、話される言葉が長くなると、その指示内容を理解できない時がある。無意識のうちに悩みを抱えてしまうことが多く、そのストレスを発散できず身体症状に表れ、頭痛に悩まされている。気候の変動によっても、頭痛は起きることがある。
	S-M 社会生活能力検査 (H30) 生活年齢-13歳7月 社会生活年齢-8歳9月 社会生活指数-67 身辺自立-6歳10月 移 動-8歳1月 作 業-11歳4月		

	意志交換－8歳1月 集団参加－8歳8月 自己統制－8歳8月
目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>適切なコミュニケーションスキルを身に付け、実践することができる。</li> <li>ストレスや不安の原因になるものと自分の身体との関係に気付くことができる。</li> </ul>

LS II 受講生（3名 昨年度にLS Iの単位を修得している）

生徒	知能検査	診断名	概要
昼間部4年 情報経理課 男 C	WISC-IV (H29) FSIQ:80 VCI:88 PRI:109 WMI:68 PSI:64  WAIS-IV (R3) FSIQ:81 VCI:90 PRI:89 WMI:74 PSI:82	ADHD 軽度 知的障害  (手帳) なし	小・中学校ともに特別支援学級在籍。失敗を恐れる傾向がある。自己評価は高く、自らの行動を客観視できていないこともある。非常に丁寧な言葉遣いをする生徒だが、その背景には人との関わり方への困難さが存在する。複数のことを同時に処理することや急な予定の変更が苦手で、混乱してしまうことがある。
目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>意欲的に他者とやりとりし、適切に相手と関わることができる。</li> <li>やるべきことを整理し、気持ちの安定につなげることができる。</li> </ul>		
昼間部3年 普通科 男 D	WISC-IV (H30) FSIQ:88 VCI:88 PRI:87 WMI:88 PSI:99	(就学前) 低体重児 重度 精神遅滞  (手帳) なし	小・中学校ともに通常学級在籍。電子音のような高音が聴き取れないことがある。相手の言葉の意図を理解することや指示された複数のことに優先順位をつけることが困難で、そのためひとりよがりな考え方をする傾向がある。感情のコントロールが苦手なことで思ったことを深く考えることなく口に出してしまったり、興奮すると手を出してしまったりする傾向がある。
目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>他者と一緒に活動しながら、適切なやりとりを考え、自分から行動することができる。</li> <li>他者の意図を感じ取り、適切に指示を理解することができる。</li> </ul>		
昼間部3年 普通科 女 E	WISC-IV (R1) FSIQ:64 VCI:53 PRI:82 WMI:76 PSI:70	知的障害 ADHD  (手帳) 精神障害 者保健福	小・中学校ともに通常学級在籍。不注意な言動が目立つ。内言語が乏しく、指示が長くなると理解が難しくなる。また、会話においては、流れについていけず、不適切な発言をしてしまうこともある。素直な性格だが、人との距離感が近すぎるため人の話

		社手帳3級	を信じすぎてしまう。SNSを介して不特定多数の人とのやり取りをしてしまう。衝動性がやや高く、金銭感覚にもズレがあるため、買い物等では我慢できないこともある。
目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>相手の気持ちを考えて行動し、適切に他者とかがかわることができる。</li> <li>主体的にやるべきことを見つけ、すべきことを整理し行動することができる。</li> </ul>		

※ 個別の教育支援計画、個別の指導計画 抜粋

## 2 年間授業計画

通級の指導では、生徒一人一人の実態に合わせて指導内容を計画・実践していくことが大前提である。しかし、全体指導が中心の高等学校において、生徒一人一人に対して指導内容を組み立てていくことは難しい。本校ではまだその体制が確立されておらず、今後、個別の指導を展開していくためには、特別支援教育の考え方が今以上に浸透する必要がある。そこで、今回の研究においては、高等学校における通級による指導が継続的に実践できるような体制作りにも重きを置くこととし、履修者全員に対して同様の授業展開をするような指導計画のモデルの作成が最優先であると考えた（授業の展開や生徒の実態に応じて、計画を変更しながら実践することもあった）。

指導内容は、本校全体の生徒の現状から「自立活動」の3項目（②心理的な安定③人間関係の形成⑥コミュニケーション）の指導に重点を置き、計画した。対象生徒は、それぞれが異なる特性をもち、比較的軽度な発達障害を有する者からグレーゾーンと呼ばれる知能指数を有している者もいる。彼らが通級による指導の内容をより深く理解できるように座学の指導だけではなく、体験的な活動を多く設定した。本校では、1回の授業が90分（45分×2時間分）であるため、前・後半に分け別の単元を扱い、週をまたいで反復的に指導を行うことで、各単元における知識の定着を図った。さらに、研究初年度の反省から、生徒の実態に合わせた指導を実現するために当初の活動内容を見直し、関連のある単元を連続して学べるように計画を立て直した。

学期	月	回	LS I		LS II	
			5時間目	6時間目	5時間目	6時間目
1学期	4	1	LSの概要・面談	ゲームを通して、気持ちを考える。	LS IIの説明・自己理解	出退勤の練習 日誌の書き方
		2	あいさつ・自己紹介の型	聴くスキル 5つのポイント	なぜ働くのか？ KJ法	作業学習（事務作業）
	5	3	人との距離 パーソナルスペース	聴くスキル 5W1H	なぜ働くのか？ KJ法	作業学習（事務作業）
		4	話すスキル 非言語の大切さ	話すスキル 詳しく伝える	ゲームをから学ぶ・ 自己理解	作業学習（事務作業）
		5	話すスキル	話すスキル	ゲームをから学ぶ・	作業学習（事務作業）

2 学 期	6		非言語の大切さ	詳しく伝える	自己理解	
		6	話すスキル ポジティブな言い回し	顔が見えない会話 (SNS)	自分の行動を 分析する	作業学習 (事務作業)
		7	話すスキル ポジティブな言い回し	顔が見えない会話 (SNS)	作業学習 (事務作業)	作業学習 (事務作業)
		8	話すスキル (まとめ)	作業学習 (他者と比較)	自分の行動を 意識する	作業学習 (事務作業)
	9	集団LSの振り返り	課題対応能力	自分の行動を 意識する	作業学習 (事務作業)	
	7	10	自分にかかる お金	課題対応能力	短所の向き合い方	作業学習 (事務作業)
		11	1学期の振り返り	1学期のまとめ	インターンシップ 事前学習	インターンシップ 事前学習
	9	12	1学期の振り返り	夏休みの反省	インターンシップ 事後学習	インターンシップ 事後学習
		13	話すスキル	聴くスキル	インターンシップ 事後学習	インターンシップ 事後学習
		14	ストレスマネジメント	ストレスマネジメント	決まり文句	作業学習 (サービス業)
		10	15	複雑な感情	対処するスキル	決まり文句
16			アングーマネジメント	対処するスキル	トラブル対策 事態の蓄積	作業学習 (サービス業)
17			ルールとマナー	対処するスキル	トラブル対策 対処法の蓄積	作業学習 (サービス業)
18			自分のやりたい職業 を見つける	職業体験 (適切な関わり方)	トラブル対策 対処法の蓄積	作業学習 (サービス業)
11		19	対処するスキル	職業体験 (困ったとき…)	トラブル対策 対処法の蓄積	作業学習 (サービス業)
		20	ストレッサー	職業体験 (まとめ)	作業学習 (サービス業)	作業学習 (サービス業)
		21	質問するスキル	自分の気持ちの 切り替え方	作業学習 (サービス業)	作業学習 (サービス業)
		22	家事を知ろう	LSII見学	作業学習 (サービス業)	作業学習 (サービス業)
12		23	質問するスキル	自分の気持ちの 切り替え方	作業学習 (サービス業)	作業学習 (サービス業)
	24	2学期の振り返り	冬休みの計画	インターンシップ 事前学習	インターンシップ 事前学習	
3 学 期	1	25	2学期と冬休みの 振り返り	自分の課題とは インタビュー	インターンシップ 事後学習	インターンシップ 事前学習
		26	1年間を振り返る	1年間の評価と 次年度の目標	1年間を振り返る	1年間の評価と 今後の目標

### 3 書式の作成

個別の指導計画や実態把握シート、指導案の書式を新たに作成した。指導案は「活動内容」「配慮事項」を明記した。山梨スタンダードの7つの視点を入れ、授業時に意識すべき点を考えながら、指導内容を決めるようにした。「ねらいに対しての評価」欄も設け、授業後に評価を書き込み、それらを学期毎に集計し、年間を通した評価をつけやすくすることができた。

#### 4 授業の構成と環境設定

LS 専用として2つの教室を確保した。LS を履修していない生徒が授業で使わないので、履修者が安心して通級による指導を受けることができる環境を設定することができた。

授業では、單元ごとにプレゼンテーションのスライドを見せて説明する形式をとっている。イラストやアニメーションを随所に取り入れ、視覚的に場面をイメージできるようにしている。スライドの切り替え時には、音を鳴らすことでメリハリをつけ、生徒が画面を継続的に見られるよう集中を持続できるようにした。その他にも、生徒が授業の見通しがもてるように授業の目標や活動内容をホワイトボードに示し、授業中に常に意識できるようにした。学習内容をまとめられるようにプリントを毎授業用意している。学んだことを疑似体験させる活動を設定するなど、異なる生徒の指導にも使用できるようなUD教材、指導手順のモデルを作成した。

授業展開では、①ウォームアップ②インストラクション③モデリング④リハーサル⑤フィードバック⑥ホームワークの順で毎回同じ流れになるようにルーティン化を図り、生徒が見通しを持てることで心理的な安定につなげた。また、授業にモデリングやリハーサル等の活動を取り入れ、机上の学習での理解にとどまらず、疑似体験をさせる工夫をした。人とのやり取りをゲーム化した活動や職業体験活動など、それぞれの活動内容によって机の配置を変えたり、教室を大きく使ったりした。

そのうえで、生徒に自己の目標に向かうプロセスの振り返らせ、特性等に合わせて修正すべき点を授業者と共有させることで、生徒自身の学びや気づきを深める工夫をした。



教室全体の配置



PCで授業の展開を確認



#### 【LS I】主に個別の指導

生徒1人に対して担当が2名(複数)の形と取っている。CTが授業を主に展開し、STはCTを補佐しながら、生徒の様子を観察し実態把握に主眼を置いている。1学期は、SST(ソーシャル・スキル・トレーニング)を用いて、話すスキル・聴くスキルの指導を行った。人との関わり方のルールや手順を教え、ゲーム等で疑似体験できるような活動を設定した。2学期は、他者の気持ちの理解に重点を置いた指導を行った。生徒に起こり得る困難な場面の対処法として、アンガーマネジメント(怒りの仕組みや怒りを抑える方法)やアサーション(自己と他者を尊重し合う関わり方)等を提示した。人と関わる時の方法を場面に応じて使い分けることの重要性やポイントを伝え、コミュニケーションに対する苦手意識を克服できるよう支援を続けた。加えて、ストレスマネジメント、問題解決訓練、職業体験学習などの内容を行い、單元毎に自己評価をさせ、改善すべき課題に気づかせるようにした。



校長先生にインタビュー



体験学習

トラブルに巻き込まれた時の  
対処法の学習

言葉遣いや気持ちの切り替え方についての学習



伝言ゲームを行った際の机の配置



パーソナルスペースを学習した時の教材とその様子



学期毎にテーマを決めて指導を実施したが、個別指導だけでは日常に定着させる（般化）ことが難しいと考え、月に1回は他の履修生徒と合同で授業を行った（小集団）。同年代とともに行う活動を通して、他の生徒の考えに触れ、より自分自身を客観視できる状況を作ることができた。日常の個別指導に対して、合同の授業は「小集団への練習の機会」という位置づけとなり、集団（社会）への参加という目標に、徐々に近づける工夫を行った。



## 【LSⅡ】主に小集団の指導

授業を“架空の会社”と見立て、生徒＝新入社員、教員＝指導担当者とし、研修を行う設定で教室内の環境を整備し、指導を行った。タイムカードやマグネットネームプレートなどを用いて企業に勤める際の出退勤の練習を想定し、授業の出欠確認に取り組んだ。授業内容には、LSⅠの内容に加え、事務作業や模擬飲食店の企画準備や接客業務演習などの活動を設定した。これにより、仕事をする責任感や達成感が生まれると考えた。ここでは、レジスターなどの機材の適切な使用方法を伝えることが主でなく、第一のねらいを活動の中で他者とのやりとりとし、意図的に取り入れた。主体的に適切なコミュニケーションをとれる力の育成をねらい、より実践的な指導を行った。通級授業を担当していない先生方にも協力を仰ぎ、生徒が職員室などで大人と関わる機会を設定した。依頼を受けた制作物を渡したり、客として来店した先生をもてなしたりしたことで他者から感謝される経験を積み重ね、自己有用感を高めることができた。その結果、生徒たちは活動内容に興味をもって取り組む中で、主体性や協働性が高まり、生徒間の自主的な話し合いが見られるようになってきた。

小集団授業の内容に合わせ、STが生徒それぞれの実態に応じて、指導を行い、各授業の目標を達成できるように支援した。また、必要に応じて、授業開始から10分をめぐりに生徒を

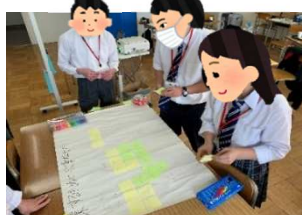
取り出し、個別面談等で心身のケアや個々の課題に向き合い解決に取り組ませる時間を確保することもあった。



タイムカードを用いた出席管理



校内掲示物作成の構造化



KJ法やカウンセリングゲームなどを用いた話し合い



生徒主体で物品の借用や飾り付けを実施して模擬飲食店を開業した

また、就労に向けて長期休業中にインターンシップを設定した。実際に働く経験を通して、企業からの評価を受けることで、生徒は自らの職業適性を知ることができた。事前・事後学習では、事前の挨拶、お礼状の作成といった活動を行い、社会で活かすことができる力やマナーの獲得を目指した。



インターンシップ（夏季休業中）



インターンシップ（冬季休業中）

##### 5 生徒に応じた手立て（事前打ち合わせと個々の指導の実施）

授業は Team Teaching (TT) で行い、CTが授業の進行、STが生徒の様子を見極め、有効な支援を実施している。授業前の打ち合わせでは「前回の授業の生徒の様子」「次回の授業の目標と指導内容」「今後の通級担当の業務」などを確認している。生徒の様子に特異な点が見られた場合は、指導方法等を検討・変更し、適切な指導・手立てや配慮を確認し、実施した。生徒が目標を達成できるように、生徒の実態のさらなる理解を深め、実態に応じた工夫を行っている。

生徒	生徒に応じた主な手立て
A	・聴覚での情報収集に困難が見られるため、ホワイトボードにポイントを板書し、視覚的に提示する
B	・言葉の意味を適宜伝え、理解を促す
C	・その場にあった、適切な考え方や行動の判断基準を随時伝えていく
D	・生徒の気持ちの変化を感じ取り、教員が関わり方を変えていく ・題材選択の意図を伝え、必要性を理解させ、興味を引き出す
E	・活動を通して、具体的な反省をするよう促す ・今感じていることを言葉で表現できるように、教員による声かけでヒントを出す

生徒がより理解できるような他の手立て	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生徒が答えた考えに対して、ST はあえてその反対の意見を言って、自分の考えを見直すきっかけを作る</li> <li>・ 生徒の感じていることを汲み取り、言葉や文章にして生徒の考えを一緒にまとめるように意識して関わる</li> <li>・ 内言語が少ないと思われる生徒に対しては、伝えたいことをより端的に伝え、生徒に復唱させモデリングを行い、実際に取り組みさせる</li> <li>・ 教師の体験した話から生徒自身にも経験のある事柄を引き出し、その題材がより身近に感じられるよう促す</li> <li>・ 活動に入る前には教師によるモデリングを行い、活動の内容を言葉だけでなく、実際の活動を見せることによって見通しをもたせるように工夫する</li> <li>・ 自分の行動が相手にどう見られているか、映像を見たり、実際の行動を振り返ったりなど自分を客観視する場面を設定したり、声かけしたりして想像させる</li> <li>・ 自己評価と他者評価にズレがある生徒に対しては、その場で評価を伝え、どのように改善していけば良いか、考えるように促す</li> <li>・ 困難な場面を想像するよう言葉かけを行い、今後そのような場面に直面した時の対処策のヒントを伝え、生徒の心理的負担を軽減する</li> <li>・ 失敗したとしてもできたところを褒め、「次はこうしようか」と肯定的な言葉かけを心がけて、生徒の意欲を高めるようにする</li> </ul>	

## 6 授業実践に関わる連携

### (1) 家庭との連携

受講生徒の「個別の教育支援計画」を生徒・保護者との懇談等で確認し、授業 (LS I・II) の計画である個別の指導計画を立てて、それを基に指導を実践している。家庭への連絡を毎時間の連絡ノートで行うとともに学期毎に評価を行い、年度終了時には懇談を実施して、単位認定とともに評価を伝えている。



## (2) 特別支援学校のセンター的機能の活用

研究1年目より、ふじぎくら支援学校の先生に授業を参観していただくとともに、的確なアドバイスをいただいている。

- ・ 様々な場面において対応策をひとつずつ具体的に考える活動の設定
- ・ 授業はじめの10分間のフリートークの活用
- ・ 生徒の実態に合わせた端的な説明の心がけ

フリートークは、「リラックスできる環境や信頼できる関係作りが非常に重要である」という助言をもとに、授業参観後からすぐに実践した。生徒の話したいことや悩んでいることなどを引き出すことにつながり、教職員と生徒の関係に変化をもたらした。また、話す機会を作ることで年間授業計画に沿った授業内での指導とは別に、生徒一人一人の課題に応じた助言を伝えることもできた。授業者のみの視点でなく、専門的見地からの視点は、指導内容・指導方法のバージョンアップのためにも必須であり、ふじぎくら支援学校への協力要請と連携継続は今後も必要不可欠と認識している。

## (3) 大学との連携

桜美林大学で認知行動療法を専門的に研究している小関俊祐准教授に授業参観をしていただき、主に自己評価について指導・助言をいただいた。

自己評価を行うことで、生徒に自己の良いところや不足しているところを理解させることができ、指導のさらなる効果を高められるとのご助言をいただいた。年間を通して生徒が自らの成長を確認できるように、年度初めや各学期終了時にアンケートを実施していくと良いという助言を受け、次年度に向け自己評価表などのツールの作成を進めている。

## (4) 企業との連携

地元企業の厚意と協力により実施できたLSIIのインターンシップでは、学校関係者とは異なる職場体験をさせていただいた企業の指導員から評価をいただくことで、自覚していない課題とも向き合い、より就労への意識を高め、意欲をもたせることができた。授業で学んだ知識を現場で生かし、「働く」ために必要なスキルを事前・事後指導を通して実感させることによって、進路指導に活かすことができた。特に、各企業には、「雇用者としての視点での評価」をお願いし、企業にその意図を理解していただき、率直かつ的確な評価をいただくことができた。ともすれば甘めの評価になりがちなインターンシップだが、生徒にとっては、自己評価と他者評価の相違を認識する貴重な機会となった。企業からの評価は、「働く」ために必要なスキル・心構えの重要性を実感できる事後指導として活用することができた。

## 7 生徒の自己評価と教員による他者評価

生徒	【上】自己評価	【下】他者評価（教員）
A	・話す、聴くスキルの学習内容を意識して生活するようになった。	

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「です」「ます」など、人に応じて話し方を変えることを意識しようと思った。</li> <li>・アルバイト先で報告・連絡・相談ができるようになってきたが、まだ考え込むことがある。</li> <li>・ストレスを抱えないように意識するようになった。悩みが軽くなった気がした。ポジティブに考えてみようと思った。</li> <li>・様々な就職先をみていきたいと思った。</li> </ul> <p><b>【LSI】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・視覚情報と比べて言語指示による聴覚情報に対しては理解がやや弱く、時間がかかることを認識しつつある。</li> <li>・5W1Hを意識して話を聞き、質問することができるようになりつつある。また、困ったときは相談することを知り、模擬飲食店の体験学習では困った状況を認識し相談できた。インタビュー活動では、事前メモを用いながらではあるが、目上の人との話し方を意識して相談したりすることができた。</li> <li>・ストレスチェックシートを活用することで原因を視覚的に把握することができ、何が負担となっているのかを考え、ストレス対処法を見出すことができた。</li> </ul>
B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ポジティブに言い換えることや場面に応じてどのような対処行動がベストか考えることが難しかった。</li> <li>・自己理解を深めることで、どの場面でストレスを感じているのかを知ることができた。</li> <li>・アンガーマネジメントで「魔法の呼吸」を勉強し、日常生活で取り入れている。</li> </ul> <p><b>【LSI】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・フリートークを通して、嬉しかったことや辛かったことを自分から話すことができるようになり、気持ちの安定につなげることができた。</li> <li>・自分の考えや気持ちを発言する場面で、失敗を恐れてしまい、深く考え込んでしまい、答えられないことがあった。その後、問題が発生した時の対処法を学ぶことで自分から他者に相談することを知り、体験活動を通して実践できた。</li> <li>・ストレスチェックシートを活用することで原因を視覚的に把握することができ、何が負担となっているのかを考え、ストレス対処法を見出すことができた。</li> </ul>
C	<ul style="list-style-type: none"> <li>・相手に誤解されないように、一旦立ち止まって別の言い方を考えてから発言するようになった。</li> <li>・報告・連絡・相談について、LSIから学習した当初は、気恥ずかしさがあった。しかし、最近はためらわず積極的に行おうと思うようになった。</li> <li>・LS履修当初と比較すれば、将来の職業、夢について明確に考えるようになった。</li> </ul> <p><b>【LSI】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・状況に応じた対応の方法を学び、相手の立場になって考えたり、相談したりすることの大切さが分かり、他者に頼ろうとする様子が見られるようになってきた。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>感情の乱れが、体調に変化を起こすことを理解することができた。今後それを予防できるように対処できると良い。また、やることが複数あると、1つのことに集中できないことがある。今後の課題として、時間や周りの様子を考えながら行動を調整ができると良い。</li> </ul> <p><b>【LSII】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>褒められたら「よくできた」、改善すべき点を指摘されたら「もうちょっと」というように自己評価の基準を一緒に決めたことで、スムーズに自己評価できるようになってきている。</li> <li>事前に約束しておくことで落ち着いて行動することが多くなった。優先順位に迷ったとしても、困ったときは報連相を意識することで以前より落ち着いて行動することができている。</li> <li>話し合い活動が増えたことで、他の履修者と話すことが増え、自分の意見を伝えたり、他者の考えを聞いたりする経験を積むことができた。また、他者のために声をかける姿が見られるようになってきた。</li> </ul>
D	<ul style="list-style-type: none"> <li>相手の気持ちを考えて行動することや困ったときの対処法などを学ぶことができたが、実際には日常生活で行動に移すことができないのが、現在の課題だ。</li> <li>なんとなくではあるが、自分の進路が見つかりそう。</li> </ul> <p><b>【LSI】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>相手の気持ちを考える活動を通して、他者のことを考えた上で行動を調整する様子が見られるようになってきた。大事なところは要点を絞り、メモを取ることができている。今後はメモを取るべき場面に気づけるようになれると良い。</li> <li>物事の優先順位を自分で考えることが難しい。効率を高めるために大事なことは何なのかを経験を積みながら考えていけると良い。インタビュー活動を通して、他者の考えを聞き、気持ちの切り替え方を知ることができた。他者に尋ねる経験を積み重ね、主体的に会話のやりとりをしながら、適切な方法を見つけられると良い。</li> </ul> <p><b>【LSII】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>不安定な状態であると、後ろ向きな発言が目立ち、心理状態によって取り組み方に差が見られた。一方で、通級教室での様子や言動はHRでの様子等とは異なっており、素直な気持ちで飾らない自分を出せるようになってきているとも考えられる。この生徒に対しては、安定した環境を設定することが、より情緒の安定を図るために重要なポイントではないかと推測する。</li> <li>積極的に活動に取り組もうとしていた。しかし、適切な対応をとれない場面があり、状況判断力には改善の余地がある。指示内容をすぐに活かす対応力に欠けるが、時間を与えると徐々に改善していく様子が見られた。</li> </ul>
E	<ul style="list-style-type: none"> <li>相手の気持ちを考えながら行動することを意識するようになった。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・困ったことがあるとき、相談するように心掛け、対処できたことが増えた。</li> <li>・インターンシップを通して、興味のもてる仕事を見つけることができた。将来の就職について考えるようになった。</li> </ul>
	<p><b>【LS1】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・相手の気持ちを考えることや他者に頼ることの大切さを知り、アルバイトなど学校外活動において知識を活用することができた。</li> <li>・思ったことを具体的にまとめることが苦手であった。教員とやり取りする中で考えを言葉で表すことに取り組み、感想としてまとめることができるようになってきている。また、「複数の指示を受けると混乱する」といった課題を理解することができた。今後、課題点を克服していく手段を身に付けていけると良い。</li> </ul> <p><b>【LSII】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・話す話題を自ら考えることまでは十分にできていないが、話し始めるまでの時間が少しずつ短縮できるようになった。自分の考えをまとめ、発表することに慣れてきた。</li> <li>・どのように対処すればうまくできるか考えることが難しく、緊張すると行動がぎこちなくなることが多い。人を相手にする場面では、話しながらさらに声が小さくなってしまふことがある。しかし、徐々にではあるが、自信をもって大きな声で元気に発声しようと努力している。</li> <li>・困ったことや迷うことがある場合には、相談する習慣が身についてきた。また、周りの様子を観察し、自分がすべきことを見つけて行動することができた。</li> </ul>

## 8 授業実践の課題

### (1) 年間計画について

年間計画を作ることで、次年度以降もLS I・IIの形をある程度イメージしながら計画を立てることが可能である。しかし、本来通級による指導は個々の特性に応じて計画するものである。コミュニケーションや人間関係の形成、心理的安定を中心とした指導教材を作成し、現在は個々の特性に応じて、実践する手法を変えることで対応したが、生徒の実態によって指導内容自体が合わないことも今後十分に予想される。次年度以降の生徒の様子に応じるため、環境の把握や健康の保持などに着目する必要がある。1年次のアセスメント期間でより的確に実態把握できるように年次担任、特別支援教育コーディネーター、養護教諭、医療、福祉などの外部機関との連携を進めていく。必要に応じて指導内容の再構成と実態に合わせた指導計画や指導法の見直しを行う。

また、体調を崩しやすい生徒に対しては、計画通りに指導が実施できないことが予想される。欠席した場合の授業の補填について、生徒の実態を考えながら考慮していきたい。

## (2) 生徒に応じた支援・指導について

受講者数については、今年度は少数だったため、個々に時間を設定し、複数人で授業を担当することもできたが、今後どの程度の生徒が履修するかにより変更を迫られる。次年度は生徒1人に対して教師1人、実態に近い生徒2人に対して教師2人などといった体制も実施していく可能性も検討している。そのため、授業前の打ち合わせ等では生徒の情報共有をより密にし、適切な指導・支援を複数人で考えていく。

また、本校教職員の更なる特別支援教育に係わる資質能力の向上を進めるために、校内研修を組織的に進める。さらに、生徒の支援内容の検討に対して助言をいただくため、特別支援学校のセンター的機能を継続的に活用していく。

## (3) 家庭との連携

本校は自校通級の方式を採っている。家庭との連絡を密にとることを基本としているが、他校通級を受ける生徒は、保護者が送迎のために来校した際、指導内容や家庭での状況を対面でやりとりすることが容易になるという研究報告もある。毎時間の連絡ノートと年度末の懇談を実施しているが、保護者と対面で言葉を交わす機会の確保を模索していく。

## (4) 就労に向けた取り組みについて

LSIIは、就労体験だけでなく、受講生徒への進路指導、その先にある進路実現へ結び付けることを目標としている。得手不得手、向き不向きを含めた特性や就労についての情報を生徒自身が身をもって認識し自己の進路を考えるには、多様な職種におけるインターンシップの場が必要である。そのためには、協力してくださる企業や福祉事業所などの確保・開拓が今後の課題となる。

また、高校のインターンシップは、3～5日程度で長期的に行えるわけではないため、継続した就労に対するイメージをもつことが難しい。インターンシップが単なる就労体験にとどまらず、その後の生活や就労に対する考えにも効果が出るように、事前学習を充実させていく必要がある。その中で、履修者一人一人に自分自身の特性について理解を深めるために必要な支援を今後も考えていく。

また、本校を卒業し、社会に出ても支援を受けられるように外部機関へのつながり方を履修者や保護者へ伝えていく必要がある。必要に応じて、外部機関との連携を深め、場合によっては、福祉サービスを利用するなどの福祉就労を含めた進路指導をしていくことも本研究の目指すところの一つである。しかし、従来の高等学校の進路指導とは異なる道筋をたどるため、障害者雇用枠での一般就労、福祉事業所における福祉就労といった進路形態も模索していく必要がある。

### III まとめ

通級による指導において本校が大きな課題と認識していることに、「通級指導を受けさせたい生徒が必ずしも全員受講しているわけではない」ということを前述で触れている。通級指導受講は、生徒・保護者の双方の希望が前提のため、生きづらさや特性の認識というデリケートな問題も絡んで、一朝一夕には克服できない課題となっている。地道な成果の積み重ねが、やがては「指導を必要としている生徒へ指導が届く」ことを期待したい。次年度も継続して、研究を進めていき、通級による指導と合わせて本校の教育環境の中で取り組める特別支援教育の充実を模索する。2年間の研究期間にとどまらない「持続可能な通級指導構築」のためにも、各方面との連携は、必要不可欠である。関係各方面の一層のご理解とご協力を切に願う次第である。

#### IV 参考文献

- ・文部科学省、特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）、開隆堂出版、2019年5月20日
- ・柘植雅義・石隈利紀、高等学校の特別支援教育 Q&A—親・教師が知っておきたい70のポイント、金子書房、2014年7月31日
- ・渡辺弥生・原田恵理子、中学生・高校生のためのソーシャルスキル・トレーニング—スマホ時代に必要な人間関係の技術、明治図書出版、2019年11月
- ・宮田愛、教師のための対人関係トレーニングサポート集 TTST—発達障害のある子供への対人関係トレーニングに取り組む教師を支援、ジヤース教育新社、平成31年1月29日
- ・上野一彦・岡田智、特別支援教育〔実践〕ソーシャルスキル マニュアル、明治図書出版、2010年3月
- ・岡田智・三浦勝夫・渡辺圭太郎・伊藤久美・上山雅久、特別支援教育 ソーシャルスキル実践集—支援の具体策93—、明治図書出版、2012年2月
- ・東京都立青峰学園、ひとりだちするためのライフキャリア教育—豊かな自立生活への第一歩—、日本教育研究出版、2016年11月1日
- ・関口トシコ、ひとりだちするための進路学習—あしたへのステップ—、日本教育研究出版、2017年10月1日
- ・子どもたちの自立を支援する会、ひとりだちするためのビジネスマナー&コミュニケーション、日本教育研究出版、2016年7月15日
- ・子どもたちの自立を支援する会、改訂版ひとりだちするためのトラブル対策—予防・回避・対処が学べる—、日本教育研究出版、2016年7月15日
- ・國學院大學栃木短期大学・星雄一郎、山梨県教育センター主催 夏季研修会、対人行動を支援するソーシャルスキル・トレーニング、2020年7月31日
- ・山梨県立こころの発達総合支援センター主催、就労支援セミナー、発達障害の就労支援～就労準備性の活用～、2020年12月25日
- ・平木典子、マンガでやさしくわかるアサーション、日本能率協会マネジメントセンター、2018年7月5日
- ・戸田久実、マンガでやさしくわかるアンガーマネジメント、日本能率協会マネジメントセンター、2020年2月25日
- ・児玉陽子、短所大辞典、アチーブ出版株式会社、2013年9月30日
- ・小関俊祐・高田久美子・嶋田洋徳・杉山智風・新川瑤子・一瀬英史・大谷哲弘・山本奨、自立活動の視点に基づく高校通級指導プログラム認知行動療法を活用した特別支援教育、金子書房、2020年2月28日
- ・盲学校・松本愛、谷村第一小学校・中野恵子、山梨県教育センター主催 夏季研修会、特別支援教育指導力向上研修会Ⅲ、2021年7月27日
- ・山梨大学・吉井勘人、山梨県教育センター主催 夏季研修会、特別支援教育指導力向上研修会Ⅰ、2021年7月30日